

ショーペンハウアーの共苦を認知的現象として定式化する試み

--情動的共感と認知的共感の区別をもとにして

末田圭果(大阪大学大学院文学研究科)

「共感(empathy)」の働きが注目され、その分析と評価が繰り返し議論されるようになって久しい。例えば、共感には特に医療や道徳の二つの分野で特にその有用性が顕著である。医療の領域では、共感には患者に対するケアの一つの契機であること、また道徳の領域では、共感が道徳的行為を動機づけることが指摘される。しかし共感がどのような営みなのか、そしてどのような共感が有用なのかは盛んに議論されてきた。共感はその様態によって二つの型に分類される。すなわち情動的共感(emotional empathy)と、認知的共感(cognitive empathy)である。ポール・ブルームは共感のこの二つの分類に沿って、それぞれの共感の有用性を考察している。そしてブルームは情動的共感の問題を指摘し、情動的共感に一般に認められているほどには十分に私たちを良い行為へと動機づけないこと、さらには情動的共感に一定の状況においてはむしろ害をなすことを論証している。情動的共感とは反対に、理性的な「思いやり(compassion)」すなわち認知的共感、道徳的行為をより正確に導くと評価される。

ところで、そのような共感の賞賛という現代の趨勢に先駆けて既にショーペンハウアーは「共苦(Mitleid)」を道徳的行為の唯一の動機とみなし、共苦によって倫理学を基礎付けている。他者の苦悩を認識する能力としての共苦は、一見すると今日の情動的共感と同じ意味であるかのようだ。それゆえ、従来の解釈は、ショーペンハウアーの共苦論の情動的側面をもっぱら強調してきたのであり、その認知的側面は全く評価されてこなかった。それに加えて、近年のショーペンハウアー研究においてさえ、共苦が情動的共感なのか、認知的共感なのか、その区別ははっきりとされていない。それどころかそもそもショーペンハウアーの共苦に二つの展開があることさえ一顧だにされてこなかった。その原因は、「共--苦(mit-leid)」という言葉が、他者の苦悩を直接感じるという印象を与え、このことは容易に共苦を情動的共感に結びつけ得るからであろう。しかしもしショーペンハウアーの共苦が現行の共感に一致するならば、ショーペンハウアーの共苦にも情動的共感と、認知的共感という区別が妥当しなければならない。そしてショーペンハウアーの共苦の規定を詳細に分析し、ブルームの共感についての議論を考え合わせれば、共苦は異なる仕方で、すなわち認知的共感として理解されなければならない。ショーペンハウアーの共苦論において情動的共感と認知的共感のより正確な区別が発見されれば、それによってショーペンハウアーの共苦論も現在のアクチュアリティの中へともたらされ得る。もちろんショーペンハウアーの共苦は規範的なものではなく、経験における一つの現象を叙述しているに過ぎない。さらにショーペンハウアーが共苦を私たちの世界をより良くする原理と見做していたのかは不明瞭であることは等閑に付されてはいけない。

ショーペンハウアーの共苦の構想にとっては、情動的と認知的という区別は必然的であるとして、共苦が経験的レベルでは認知的共感であることを示すことを本発表の目的とする。共苦はショーペンハウアーの倫理学を理解する上では、本質的な要素であるにもかかわらず、そもそも共苦の解釈は定ま

っていない。もっとも、哲学史的なショーペンハウアー解釈とは異なり、共苦を超越論的枠組みで理解することを試みる哲学者はいる。しかしそれでも尚、共苦を情動的側面と認知的側面に分けて、ショーペンハウアーの共苦が後者を意味することは十分に強調されていない。本発表の共苦理解はブルームの共感論と超越論的解釈に負っており、それに基づいて、ショーペンハウアーの共苦は認知的共感として特徴付けられ得る。しかもこのような解釈は、共苦のより一貫した究明を可能にする。本発表の議論は以下の流れで行う。まず初めに、ブルームの共感批判を紹介し、情動的共感の特徴と問題を挙げる。その際、情動的共感と認知的共感の区別も議論される。続いて、ショーペンハウアーの懸賞論文「道徳の基礎について(Über die Grundlage der Moral)」と、彼の主著である『意志と表象としての世界(Die Welt als Wille und Vorstellung)』に基づいて、共苦がいかなる状態かを記述する。加えて、共苦の伝統的な理解を提示するとともに、共苦にまつわる先行研究について報告する。最後にブルームの議論に基づいて、ショーペンハウアーの共苦論を現代科学の知見から理解し、同時に共苦のメカニズムを超越論的に示す。その際、たとえショーペンハウアー自身が、共苦に情動的と認知的の区別を持ち込んでいないとしても、共苦は認知的共感に一致すること、そしてむしろそのような区別なくしては、ショーペンハウアーの共苦論は一貫して解釈し得ないことが明らかになる。

一見すると本発表で示される共苦の理解は、伝統的なショーペンハウアー解釈とは非常に異なり、それと相容れないように思われる。しかし二つの次元、つまり経験的次元と、形而上学的次元で共苦が考え得る限りにおいて、本発表の結論は従来の理解をさらに展開するものであり、それに反するものではない。ショーペンハウアーの共苦論を現代の共感論に結びつける本発表の試みは、共苦の理解に新しい視点をもたらすことになり、それによってショーペンハウアー哲学の実践的な応用可能性も展開されることになる。